

日本宋代文学学会 第一回大会

—プログラム—

■日時： 2014年 5月31日(土) 9:30開場 10:00開始

■会場： 京都大学 文学部 第1講義室

■参加費： 1,000円

午前の部 10:00~11:30

司会 内山 精也

- 9:30 開場／受付開始
10:00 主催校あいさつ 京都大学 緑川 英樹
会長開会あいさつ 大阪大学 浅見 洋二

◆中国宋代文学研究の新世代◆

司会：早稲田大学 内山精也

- (I) 10:10~10:30 : 蘇軾對賦體的標舉 —以《超然臺賦》、《黃樓賦》為例—
復旦大学大学院 李 棟
- (II) 10:30~10:50 : 曾布《水調歌頭》大曲述略
江蘇師範大学 李 俊 標
- (III) 10:50~11:10 : “晚唐體”、“誠齋體”與“江湖體”
—以詩歌的通俗化為中心— 江漢大学 熊 海 英
- (IV) 11:10~11:30 : 文苑或儒林:思想史視野下的黃潛
浙江師範大学 慈 波

—昼休み(11:30~13:30)—

- ・理事会 11:45~12:30
- ・評議員会 12:30~13:00

※ 会場はいずれも文学部「第2講義室」です。

※ 昼食を摂りながらの会議となります。昼食は各自ご用意下さい。

(V) 13:30~13:50 : 宋末元初における「遺民」像

大阪大谷大学 稲垣 裕史

司会：慶應義塾大学 種村和史

(VI) 13:50~14:10 : 南宋詠花詩と花文化：江湖派を中心に

東京大学大学院 加納 留美子

司会：東海学園大学 松尾肇子

(VII) 14:10~14:40 : 曾鞏筆下的女性書寫：一個來自儒家生命的思索

台湾師範大学 王 基倫

司会：同志社大学 副島一郎

(VIII) 14:40~15:10 : 宋話本《錢塘湖隱濟顛禪師語録》考論

復旦大学 朱 剛

司会：佛教大学 中原健二

—休憩(15:10~15:30)—

(IX) 15:30~17:00

◆シンポジウム◆

近世出版文化の幕開け
宋代の文集編纂と流伝を巡って

趣旨説明／司会：九州大学 東 英寿

- | | |
|-------------------------|----------------|
| ① 蘇軾『和陶詩集』流伝考 | 九州大学専門研究員 原田 愛 |
| ② 福建の出版と詞籍 | 岡山大学 藤原 祐子 |
| ③ 宋編宋人文集と墨蹟・碑刻 | |
| —南宋における蘇軾・黄庭堅詩注の編纂を中心に— | |
| | 大阪大学 浅見 洋二 |

JSPS科研費基盤(B)「宋代文集の編纂と伝承に関する総合的研究」班共催

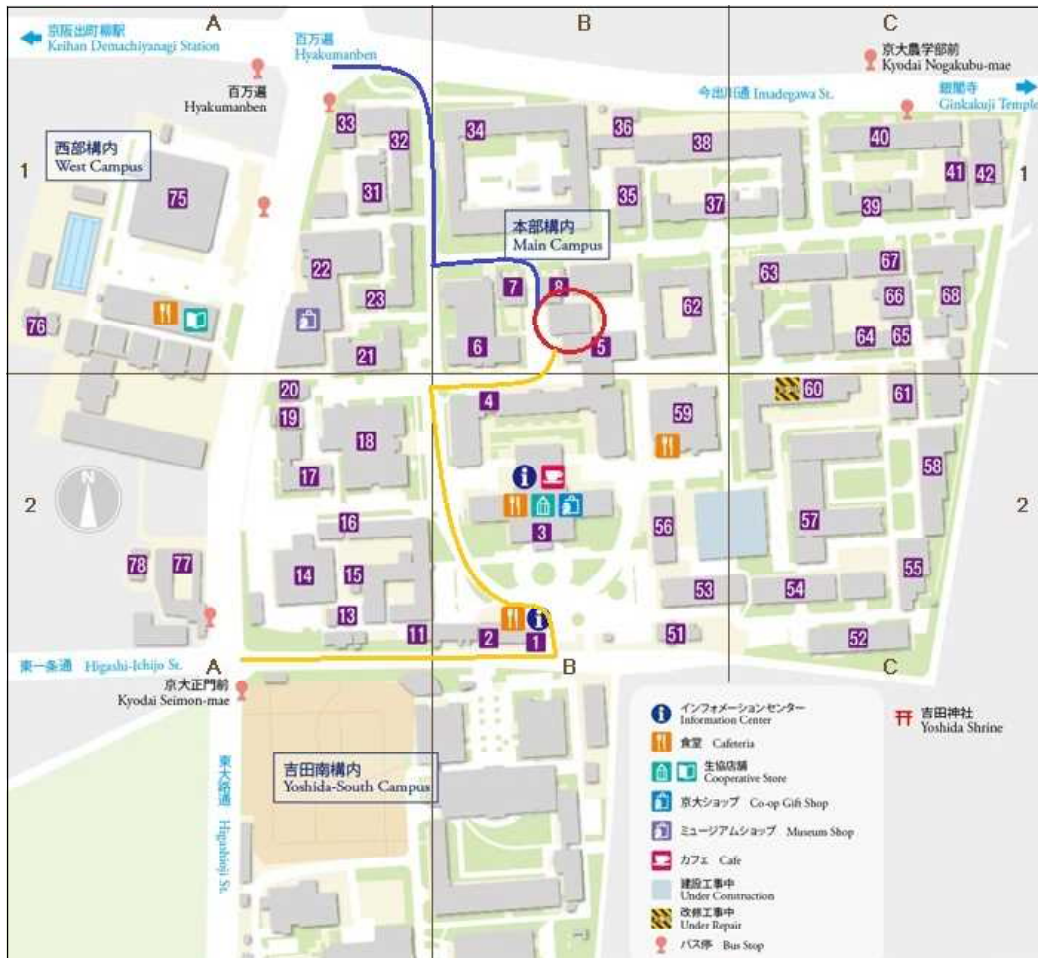
■総会 17:15~18:00

■会費 5,000円前後 18:30~

■会場 「うまいもんや こむ」百万遍店 (百万遍交差点を東大路通に沿って北に徒歩1分)

075-723-3393 <http://kom.obanzaiya.jp/>

■大会会場(京都大学構内図)■



赤の楕円形の建物が、会場の校舎です。

青のラインは、百万遍の交差点から行く経路で、黄緑のラインは、京大正門前の交差点から行く経路となります。

JR京都駅D2乗り場から、市バス206系統「東山通 北大路バスターミナル」行に乗って、30～40分で、「京大正門前」もしくは「百万遍」に着きます。

懇親会場は、百万遍交差点を上(北)に進んですぐにあります。

— 發表要旨 —

[午前の部]

◆ 中国宋代文学研究の新世代 ◆

I. 蘇軾對賦體的標舉 —以《超然臺賦》、《黃樓賦》為例—

復旦大學博士生 李 棟

在北宋科舉考試的“詩賦與經義之爭”中，蘇軾始終堅持詩賦取士的主張，這一主張不但表現在他關於科舉考試的意見闡述中，也與他的文學實踐相互映襯。本文想要選取《超然臺賦》與《黃樓賦》為研究對象，從具體的作品入手，討論蘇軾對賦體的特別標舉。《超然臺賦》與《黃樓賦》的產生，既是蘇軾對自己主張的表達，也是他試圖緩解賦體衰落的境況而做出的努力。

II. 曾布《水調歌頭》大曲述略

江蘇師範大學 李 俊 標

曾布開有宋之新風，運用與唐代不甚相同的新水調創作了《水調歌頭》大曲，並且在《水調》最後一遍創造性地採用了《六么花十八》曲，這些都對增強大曲的敘事、抒情起到了積極作用。曾布結合自身之感慨，用此種大曲演繹了一段首尾完整的故事，在天水一朝可謂得其先聲。分析此曲，不僅有助於中國古代大曲的研究工作，也能對曾布本人以至北宋的變法革新運動帶來一些新的思考。

III. “晚唐體”、“誠齋體”與“江湖體” —以詩歌的通俗化為中心—

江漢大學 熊 海 英

- 一 似與不似之間的“晚唐體”與“江湖體”
- 二 他山之石與“我有明珠”——楊萬里對晚唐詩的闡釋與“誠齋體”的離雅就俗
- 三 把小眾大師變成流行符號——重複“姚賈”的“四靈”們
- 四 “江湖體”的通俗化與詩歌“除魅”(disenchantment)

IV. 文苑或儒林：思想史視野下的黃潛

浙江師範大學 慈 波

黃潛元代被列入“儒林四杰”，後世却多以文章大家視之。文苑與儒林的認識落差，提醒我們關注元代思想文化的特有樣貌。稀見的科場程文印證了黃潛純熟的儒學素養，他注力於將思想引入具體領域，以朱學為主導、重視分殊之學、突出學術因素、強調實地修為，及至兼綜道釋，會一歸同，卻缺乏在本體層面推進儒學的業績。這並非黃潛的局限，而是思想文化的時代特點。作為科舉時代的士人理想，呂祖謙所提出的合談理與論文於一轍的境界，在宋元之際浙學三個重要區域永嘉、四明與婺州幾無嗣響，文苑與儒林呈現出分裂樣態。而在黃潛一系士人群中，義理與文章的會合，卻得到集中標舉並成為其黽勉推行的軌則。《元史》在體例別擇方面合儒林、文苑為一，從而通過正史將黃潛一系的主張推至新的高度。黃潛的努力反映出儒學達到成熟樣態之後，義理與文章之間的複雜互動關係。

〔午後の部〕

V. 宋末元初における「遺民」像

大阪大谷大学 稲垣 裕史

「遺民」という語は、現代においては旧王朝に節義を立て、新王朝に出仕しない人物に用いるのが一般であろう。「遺民」をめぐる議論は、ともすれば民族主義的な感情論に陥りがちである。旧王朝が滅びた後、新王朝に出仕する者を「忸臣」として批判する議論は明清期に顕著となってゆくが、このような「忸臣」の議論を宋末元初の文人にそのまま適用することはできない。このことを日本で最初に論じたのは村上哲見「忸臣と遺民——宋末元初江南文人の亡国体験」（『中国文人論』、汲古書院、一九九四）である。氏の議論は、元朝に出仕した南宋文人の数が相当数に上るという事実の指摘に重点がある。このため、当時の文人たちが実際にどのような文脈において「遺民」の語を用いているのか、その実例については十分な検討がなされていない。今回の発表では、宋末元初における「遺民」の語の用例に注目し、そこから帰納される当時の「遺民」像と、明人の定義する「遺民」像とを比較する。

VI. 南宋詠花詩と花文化：江湖派を中心に

東京大学大学院 加納 留美子

宋代とは、花卉の栽培や観賞が従来に比べ、一層盛んとなった時代である。各地で皇族や高位高官による大規模な庭園が次々に造営され、それだけでなく、花の見ごろを迎えれば一般庶民に公開されること

もあつた。また、牡丹や芍薬、菊のように人気の高い花は園芸の専門業者（花戸）によって品種改良が進められ、創り出された数多くの花々が、商品として専門の市場（花市）で売買されていた。そして、「中春」に当たる二月十五日は「花朝節」つまり花の日とされ、この日に人々は挙って各地の庭園を訪れ花の観賞に興じたという。個々の事例は、貴賤を問わず花への関心が高まり、それに伴って花の商品化・園芸の商業化が発達していったことを物語る。

こうした花文化の隆盛した宋代、特に南宋において、文学の領域にあつても幾つかの興味深い現象が確認できる。宋代の知識人たちに重要視された花として梅花と菊が挙げられるが、南宋以降、「梅屋」「菊潭」のように号に花の名を有する知識人が相次いで登場し、その作品集は『梅屋集』『菊潭詩集』と名付けられていたのである。号に採ったとは、単に愛好したからでなく、その花に対するイメージが当時の知識人たちの理想に合致していた故とも考えられる。とりわけ、知識人たちの梅花への傾倒は明らかで、梅花を詠んだ詩詞を集めた专著が複数編まれた他、「梅花百詠」の如き大型の連作詩まで登場した。今回は、南宋の詠花詩に見られる特徴について、主に江湖派詩人と梅花に着目しつつ論じたい。

VII. 曾鞏筆下的女性書寫：一個來自儒家生命的思索

台湾師範大学 王 基 倫

北宋古文家曾鞏，終身服膺儒家思想，強調仁義道德的發用。他的筆下，如何評述當代女性，這是引人好奇深思的問題。

考察曾鞏的古文作品，主要是以墓誌為載體，評述女性的美德。他秉承漢代《禮》學的說法，依循「三從」的觀點，肯定女性盡子道、盡妻道、盡母道，又依循「四德」的觀點，肯定女子在家事方面的操持，這當然是受到儒家思想的演化所形成的社會背景，而有以致之。曾鞏繼承漢儒的解釋，欣賞婦女孝順的行為、恭敬的態度之外，也特別肯定能勤儉持家的女性。雖然說，古代女性的評述大多是男性社會制約下的產物，但是曾鞏記人事時，追求信實而語言繁簡適中；寫悲情時，溫和平正而不激切，有他自己的寫作風格。觀察曾鞏對女性的書寫，一方面能對宋代的儒學教義影響力之大有更深刻地理解，一方面也能看出曾鞏如何將儒家經典的理解落實在現實社會生活中。

VIII. 宋話本《錢塘湖隱濟顛禪師語錄》考論

復旦大学 朱 剛

明隆庆刻本《钱塘湖隐济颠禅师语录》实为话本小说，与有关道济禅师以及南宋禅林的可信史料相比对，我们可以修正该刻本的一些文本错讹，进而推断话本关于济公家世和生平基本履历的叙述符合史实。话本涉及的临安高僧群，多数实有其人，有关他们的叙述虽经过一定程度的改编，但这种改编准确地反映出南宋禅林的人事背景，并非后人所能措

手。话本还涉及众多“太尉”，其实际身份应是南宋的贵戚、武官，且太尉如此之多，乃当时特有之现象，话本的有关情节自然也是宋人所编。故从内容而言，这基本上是一个宋话本。

* * *

IX. シンポジウム

近世出版文化の幕開け 宋代の文集編纂と流伝を巡って

九州大学 東 英寿

宋代文学の特色の一つとして、出版文化の隆盛に伴い文集の編纂が盛んになったことがあげられる。当時刊刻された版本の一部が現在に伝わるだけでなく、文集について記した序文・跋文の資料も数多く残され、文集編纂状況を考察する上で、宋代はそれ以前とは比較にならないほどのメリットを有している。本シンポジウムでは、当時各種テキストがいかにかみ出されて文集という形にまとめられていったのか、さらに文集としてまとめられたテキストがどのように受容・伝承されたのかという視点から、宋代文学に対してアプローチを試みる。

① 蘇軾『和陶詩集』流伝考

九州大学専門研究員 原田 愛

晩年に嶺南・海南島に流された蘇軾は、陶淵明を特に敬仰し、その詩に和韻する「和陶詩」を完成させた。その彼の晩年から歿後にあたる北宋末は、旧法党人が弾圧された頃であり、特に蘇軾はその文名の高さ故に標的の筆頭であった。そこで、蘇軾は、その生前から弟の蘇轍に和陶詩の継和を勧め、蘇門にもそれを広めんとした。且つ、『和陶詩集』（『東坡先生和陶淵明詩』を略）全四巻の管理と流伝にも注意を払い、母方の従兄である程之才にも一部を委託した。黄庭堅によると、蘇軾の歿年である建中靖国元年（1101）には、荊州の蔵書家のもとにも『和陶詩集』が伝わっていたという。このように、蘇軾『和陶詩集』は、冬の時代においても大きな広がりを見せたのである。

本発表では、こうした個々の事象を踏まえながら、後年の四系統の『和陶詩集』が生まれた経緯を総合的に明らかにしたい。また、これまであまり論究の見られなかった元代における「和陶詩」の影響を辿ることで、『和陶詩集』がどのように後世に流伝していったのかを照射したいと思う。

② 福建の出版と詞籍

岡山大学 藤原 祐子

宋元期、出版産業の発展に伴って、詞の分野においても詩文とは別行の個人の詞集や

詞選集、詞話集をはじめとする詞籍も、盛んに編纂・刊行されるようになる。これら詞籍出版の中心地の一つは、おそらく福建であった。従来、福建は挙業書や実用書、及び小説などの俗文学関係の出版で有名であり、それらの版本についての研究や出版業者についての探求は、これまでから比較的多く行われてきている。その中で、詞籍は現存数が少ないのみならず、存目数さえ少ないこともあって、他の書籍との関連性といった側面から取り上げられることが、あまりなかったように思われる。だが、福建で出版された（少なくとも福建と深く関わっていることが明らかな）詞籍には、やはり同時期に同地で出版された書物のもつ特徴と、非常に似た特徴を有しているものがある。数の少なさと詞という文学形式の持つ特殊さから、その他の出版物とは切り離されてその形式や内容の意義を考えられがちだった詞籍を、今後はもう少し広い視野で眺めていくことも必要ではないだろうか。

③ 宋編宋人文集と墨蹟・碑刻

—南宋における蘇軾・黄庭堅詩注の編纂を中心に— 大阪大学 浅見 洋二

宋代、特に南宋期における宋人の詩文集の編纂に際しては、作者の親筆原稿や石刻拓本が盛んに活用されるようになっていた。そのことは例えば蘇軾と黄庭堅の詩集注本の編纂において顕著に見て取れる。他に欧陽脩の全集編纂をこれに加えてもいいだろう。こうした点に着目して、発表者はすでに施元之等注『施注蘇詩』、任淵注『山谷内集詩注』、史容注『山谷外集詩注』、周必大編『欧陽文忠公集』などを主たる材料として若干の考察を試みてきたが、なお不十分なところ少なくない。拙論「黄庭堅詩注の形成と黄魯『山谷年譜』——真蹟・石刻の活用を中心に」（『集刊東洋学』第100号、2008）、「校勘から生成論へ——宋代の詩文集注釈、特に蘇黄詩注における真蹟・石刻の活用をめぐる」（『東洋史研究』第68巻第1号、2009）、「中国宋代における生成論の形成——欧陽脩『集古録跋尾』から周必大編『欧陽文忠公集』へ」（『文学』第11巻第5号、2010）を参照。今回は、その後あらたに得られた知見なども踏まえつつ、南宋の宋人文集編纂において墨蹟・碑刻の果たした役割をより総合的に明らかにするとともに、宋編文集に関する研究が取り組むべき今後の課題についても考えてみたい。